

グローバル化とポスト・コロニアリズムの変容  
—マレーシアにおけるインド系国民による民族解放運動—

駒澤大学 山田 信行

1. 課題

本報告では、グローバル化とともに世界システムにおける半周辺へと上昇したと考えられるマレーシアを事例として、そこで展開されるインド系国民による「民族解放運動 (national liberation movement)」の背景を考察することを通じて、ポスト・コロニアリズムの展開とその変容を把握することを課題とする。

2. 経緯

本報告では、まず 1970 年代以降に本格化するマレーシアにおける工業化の過程を簡単に概観する。そのうえで、1980 年代後半からのグローバル化の進展とそれに伴う半周辺化に関連して、マレーシアにおいてもサービス経済化が進展していることを確認する。この一環として、従来エステート (estate) とよばれるプランテーション地区が再開発の対象となり、新中間階級向けの住宅開発とあいまって、大規模な土地投機が行われていることを確認する。

3. 背景

こうした経緯をふまえて、本報告ではプランテーションにおける労働に従事してきたインド系住民がプランテーション内で提供されてきた住宅を追われ、クアラルンプールなどの大都市周辺におけるいわゆるスクォッター (squatter) 地区に居住せざるをえない状況を確認する。こうしたインド系住民は、マレー系住民からのエスニックな差別の対象となり、例えば暴力事件の対象となっていることを明らかにする。さらに、こうしたインド系住民は、マレーシアにおける主要なエスニック・グループのなかにおいても、まさにコロニアリズムの最大の犠牲者であり、その意味で「反システム運動 (antisystemic movement)」の一環である「民族解放運動」の担い手であることを明らかにする。加えて、このような「民族解放運動」が特定のエスニシティによって担われることを背景にして、それがひとまずはローカルな性格を持つ運動であることを確認したい。

4. 展開

次いで、本報告では、マレーシアにおける民族解放運動として「ヒンドゥー教徒の権利行動隊 (Hindu Rights Action Force, HINDRAF)」の展開を概観しながら、それが自らのエスニックな文化的伝統の保持をイシューとするローカルなフレームを媒介しながらも、植民地の宗主国であったイギリス (エリザベス女王) に対する告訴に象徴されるようにグローバルなイシューとしても把握されていること、さらに、そうしたグローバルなものへのフレームの拡大は、グローバル化の一環として進行するあらゆるエスニシティにおける格差の拡大、すなわち階級的イシューの優越に帰結している実態を指摘する。

5. 展望

最後に、この報告においては、多くの場合、特定のエスニシティによって担われる民族解放運動が階級というフレームで展開される可能性について、マレーシア社会の現状を視野に入れながら展望することにしたい。